

11月27日 エレミヤ書 33章 14～16節 今日の説教から

説教題：「救い主の名前」

イエス様は、どのような姿をしていたのでしょうか。どのような声で人々に語り掛け、どのような服を着て町々をめぐっていたのでしょうか。私たちははるか2000年前の出来事を、その姿を目にすることは出来ません。想像することしかできません。しかし、時に私たちはイエス様の姿を自分勝手な解釈によってゆがめてしまうことがあります。

私たちは時に自分の都合のいいように物事を見てしまうことがあります。聖書にその姿が書かれていないにもかかわらず、「イエス様はこのような素敵なお方だったに違いない」と先入観を持ってしまうように、私たちが普段生活をする中でも、「この人はこんなことは言わないだろう」「こんなことはゆるされてはいけない」と、どうしても先入観を持ってしまうものがあります。もちろんそれは「直観」という形で私たちに真実へと導く場合も多くあります。

「命を大切にしないとイケない」「戦争は絶対イケない」など、私たちにあって慣れ親しんだ価値観は先入観と同じように私たちの行動の前提となり、もちろん正しいものも多くあります。ただ、その先入観を頑なに手放さない場合、私たちはその価値観を神様の言葉よりも重要視してしまうこととなります。その結果は、今日の聖書箇所エレミヤ書の時代に滅ぼされてしまったユダ王国、イスラエル王国のように、偶像崇拜という恐ろしい罪に陥ってしまうことになるのです。

常に自分の中の常識を疑い、常に柔軟に御言葉を受け入れ、聖書の言葉に、イエス様の言葉に立ち戻ることが私たちには求められます。どうしても自分が正しいと思ってしまうことになりやすいものですが、私たちは神様に会って、イエス様に会って、真実が自分自身の中ではなく神様自身の中にあることを知っているはずで、だからこそ私たちはそれまでの生活ではなく、神様の言葉に従う生活へと悔い改めて、洗礼に至ることが出来たのです。悔い改めは、ただ一度きりすればいいというものではありません。自分の未熟さを知った時、自分が間違ってしまったと理解したとき、また神様の言葉に従って生きようと立ち直ることによって、私たちは信仰の道へと立ち返ることが出来ます。神様はいつでも私たちに救いの御手を伸ばしてくれています。その手を取るかどうかは私たちには委ねられている、その最後の決断を神様はいつも私たちに促しているのです。

私たちは、多くの目に見えないものを信じて信仰を歩んでいます。目に見えてはいないけれど、それでも信じていることが出来ているのです。それは、イエス様の名前に示されているように、「主は我らの救い」であるからこそ、神様が私たちに必ず救いに導いて下さるという確信があるからこそ、辛い時でも、苦しい時でも絶望に沈むことなく歩むことが出来るのです。

今年のクリスマスも、新型コロナウイルスという災いが取り除かれる前に訪れることになるでしょう。それでも私たちは絶望する必要はありません。私たちの神様は、「主は我らの救い」であることに間違いはないのです。その希望を胸に抱きながら、今週一週間を、このアドヴェントの日々を共に歩んでいきましょう。

今日の説教箇所：エレミヤ書 33 章 14～16 節

- 14: 見よ、わたしが、イスラエルの家とユダの家に恵みの約束を果たす日が来る、と主は言われる。その日、その時、わたしはダビデのために正義の若枝を生え出でさせる。彼は公平と正義をもってこの国を治める。その日には、ユダは救われ、エルサレムは安らかに人の住まう都となる。その名は、『主は我らの救い』と呼ばれるであろう。